

## 〈原著論文〉

# 幼児期の健康と生活実態に関する研究

— 新型コロナウイルス感染症による影響調査 —

矢野氏郷\*

## Research on Health and Living Conditions in Early Childhood

: Emergency Investigation of Impact of  
New Coronavirus Infection (COVID-19)

(YANO Ujisato)

### 1. はじめに

近年、子どもたちの生活リズムの乱れが指摘されて久しい（前橋、2001など）。幼児をめぐる食事や睡眠、運動に関する諸問題については、20年ほど前から多くの研究者や行政機関等が警鐘を鳴らし、その改善に向けて努力はしているものの、依然として課題が残されているのが現状である。

幼児の食事、睡眠、運動といった生活習慣に関する先行研究では、その現状と課題についての調査や（中下ら、2019）、家族との朝食の共食頻度と生活習慣との関連の解明（会退ら、2011）、生活習慣と身体活動量の統計的検討（中野ら、2010）がなされてきた。さらには、幼児の生活習慣を調査したもの（平山ら、2018）、幼児を対象に生活習慣の実態を調査し、課題について明らかにしたもの（松坂ら、2018）等、近年の子どもの生活と健康をめぐる分野の研究が積み重ねられつつある。以上の先行文献の検討からは、特に子どもの起床時刻が遅くなり、朝食をしっかりと摂っていなかったり、幼児や就寝時刻が遅くなったりする問題がますます深刻化していることなどが指摘できる。大曾（2018）も述べているように、幼児期の基本的な生活習慣は、学童期以降の食生活、睡眠習慣、体力・運動能力に強く影響を及ぼすものである。

起床時刻は、おおむね朝7時30分くらいまでには起きているが、一方で就寝時刻では2002年の調査において、夜10時以降に就寝する幼児が50%以上いることが、渋谷ら（2002）によって

---

\* 近畿大学教職教育部非常勤講師

〔キーワード〕 健康な生活、生活習慣、幼稚園幼児、緊急事態宣言、新型コロナウイルス感染症

報告されている。さらに、谷田貝 (2008) の報告にあるように少数ながらも夜中まで起きている幼児もいるのが現状である。さらに、夜10時以降の幼児の行動を見てみると、テレビやビデオ視聴、保護者との遊びが主で、親の遊びや社交に付き合っているケースが多いことが、前橋 (2001) によって報告されている。近年の新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) (以下、新型コロナと略す) の影響もあり、就寝時刻や起床時刻に乱れが起こっているのではないかと推測される。

これらの調査からおおよそ20年が経過し、その深刻さは増しているものと推察される。さらに、世界的にも未曾有ともいわれる新型コロナの影響もあり、with コロナといわれる時代で「新しい生活様式 (new lifestyle)」が求められる中、特に子どもの起床時刻や就寝時刻に乱れが起こっているのではないかと考えられる。森田 (2021) も新型コロナ感染拡大に伴い日常生活の変化が、幼児の発育発達に影響した可能性を明らかにしている。したがって、平時以上にコロナ禍での「新しい生活様式 (new lifestyle)」や保護者の育児の疲弊と相まって、子どもの生活習慣の乱れがますます深刻化しているものと容易に予測できる。例えば、幼児の登園時刻を考えた場合、就寝時刻が遅くなり、その結果として起床時刻が遅くなり、睡眠時間が十分に確保できず、日中の活動が不安定になると考えられる。子どもの健康な生活習慣は、ある一つが乱れると悪循環をもたらし、弊害を引き起こすことは言うまでもない。コロナ禍では平時以上に幼児の生活習慣が乱れ、それが深刻化しているのではないかと予測がなされている。その予測に続いて深刻化している実態などを明らかにすることが、「新しい生活様式」を求める現状や今後の混沌とした社会を生きていくうえで、保護者の意識改善につながるなどの有用性が見込まれる。そこに、本研究の意義を見出すことができるのではあるまいか。現代の日本では、多様化する家族形態や労働環境等の社会情勢がそれぞれにあり、その改善には困難な点も多く認められるが、基本的な生活習慣の育成は谷田貝 (2008) の述べるように、子どもの社会への適応性の芽生えを育むことを意味しており、子育てをする上で極めて尊重されるべき事項である。そのためには、保護者の意識の改善・指導もまた重要になってくると考える。

## 2. 目的

そこで本研究では、新型コロナの「緊急事態宣言」下における幼児の生活実態への影響や現状を緊急に調査することで、子どもの健康・安全な生活を守る方策および幼児の健全な生活の在り方、学校園や家庭での健康に役立つ資料を得て、after コロナや今後の子どもの健康の指

導方法を明らかにすることを、主な目的とした。

### 3. 方 法

#### (1) 調査対象者

関西の A 市内にある B 幼稚園児112名（3 歳児37名、4 歳児42名、5 歳児33名）の保護者を対象に、アンケートによる調査を実施した。A 市は、近畿圏に属する県庁所在地であり、その歴史は大変古く、時代によっては都が置かれたことから、古都とも称される地域であり、現在は新興住宅地でもある。人口は、約40万人である。A 市内に位置する対象の B 幼稚園は、私立の幼小中高一貫の学校であり、教育システムとして3-4-4-4 制をとっている。そのうち、幼稚園段階の3 年間を PP (Pre-primary) と称して独自の教育を行っており、注目されている園でもある。

#### (2) 調査内容及び手続き

調査時期は、政府の第1 回目の「緊急事態宣言（2020（令和2）年4 月7 日から5 月6 日までの1 か月間）」が解除されて約1 カ月となり、幼稚園への分散登園がスタートした2020（令和2）年6 月上旬から中旬にかけてであった。調査の手続きは、B 幼稚園の担任教諭から保護者に依頼し、調査園での留め置き法により、質問紙による調査アンケートを実施した。なお回答期限は、6 月末とした。

調査内容は、①年齢・性別、②起床時刻、③起床状態、④朝食摂取状況、⑤登園までの様子、⑥降園後の遊び場所、⑦夕食時刻、⑧夕食時の食欲、⑨就寝時刻、⑩寝つきの計10項目であった。

統計処理には、IBM SPSS Statistics 26 を用いて算出した。また、新型コロナの影響を抽出するために、コロナ報告前の前年11月に同じ B 幼稚園で実施したデータ（矢野、2020）を用いて  $\chi^2$  検定を実施し、それぞれを比較した。

#### (3) 倫理的配慮

本研究の対象となる B 幼稚園の保護者及び園長に対し、本研究の目的、内容と調査項目、個人情報取り扱いを文書で説明し、本研究に同意しなくても園生活において不利益とならないことを説明した。調査の目的や方法、調査の回答についてはあくまで任意であること、個人

や所属が特定されることはなく無記名であり、アンケート調査で得られた個人情報は保護されることを園や保護者に文書で説明し、本研究に賛同が得られた保護者からの回答のみを分析に用いた。

## 4. 結果

### (1) 調査回答者の内訳及び回収率

研究協力園の園児112名（3歳児37名、4歳児42名、5歳児33名）の保護者を対象に実施し、幼稚園での留め置き法であり、回収率は100%であった。回答の内訳を、Table 2 に示す。前年度と比較するため、2019年の単純集計の結果を、Table 1 に示した。

Table 1 回答の内訳 (2019)

	3歳児 (n=31)	4歳児 (n=32)	5歳児 (n=45)
男児	14	23	22
女児	17	9	23

Table 2 回答の内訳 (2020)

	3歳児 (n=37)	4歳児 (n=42)	5歳児 (n=33)
男児	18	21	21
女児	19	21	12

### (2) 朝の状況

「起床時刻 (wake up time)」は、朝7時までに起床している幼児が、3歳児で35.1%、4歳児で40.7%、5歳児では54.5%であった。また、7時から7時半までに起床している幼児が、3歳児は37.8%、4歳児は42.9%、5歳児は42.4%であった。今回、7時30分以降の起床は、どの年齢にも認められた。なお、8時以降の起床は、3歳児に1人 (2.7%) だけみられた。昨年との比較では、有意な差は認められなかった。

「起床状況 (waking situation)」では、「自分で起きる」が3歳児で75.7%と最も多く、次いで4歳児の73.8%、5歳児の72.7%で、3歳児や4歳児といった年齢が低いほど、起床の自立

Table 3 B 幼稚園児の生活状況（2019と2020の比較）

生活項目	区 分	2019年11月			2020年6月			比較
		3歳児 (n=31)	4歳児 (n=32)	5歳児 (n=45)	3歳児 (n=37)	4歳児 (n=42)	5歳児 (n=33)	
起床時刻	～7:00	14 (45.2%)	16 (50.0%)	19 (42.2%)	13 (35.2%)	17 (40.5%)	18 (54.5%)	n.s.
	7:00～7:30	12 (38.7%)	13 (40.6%)	19 (42.2%)	14 (37.8%)	18 (42.9%)	14 (42.4%)	
	7:30～8:00	5 (16.1%)	3 (9.4%)	6 (13.3%)	9 (24.3%)	7 (21.4%)	1 (3.0%)	
	8:00～	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (2.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	
起床状態	自分で起きる	21 (67.7%)	25 (78.1%)	27 (61.4%)	28 (75.7%)	31 (73.8%)	24 (72.7%)	n.s.
	起こされるほうが多い	10 (32.3%)	7 (21.9%)	17 (38.6%)	9 (24.3%)	11 (26.2%)	9 (27.3%)	
朝食摂取	毎日食べる	26 (83.7%)	30 (93.8%)	41 (91.2%)	31 (83.8%)	38 (90.5%)	31 (94.0%)	n.s.
	だいたい食べる	5 (16.2%)	1 (3.1%)	3 (6.7%)	5 (13.5%)	4 (9.5%)	1 (3.0%)	
	ほとんど食べない	0 (0.0%)	1 (3.1%)	0 (0.0%)	1 (2.7%)	0 (0.0%)	1 (3.0%)	
登園までの様子	活発	25 (80.6%)	29 (89.1%)	26 (60.5%)	33 (89.2%)	35 (83.3%)	29 (87.9%)	n.s.
	ボーっとしている	6 (19.4%)	2 (4.6%)	10 (23.2%)	0 (0.0%)	6 (14.3%)	4 (12.1%)	
	機嫌が悪い	1 (3.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (10.8%)	1 (2.4%)	0 (0.0%)	
	その他	0 (0.0%)	2 (6.3%)	7 (16.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	
降園後の遊び場所	だいたい屋外が多い	7 (22.6%)	5 (15.6%)	9 (20.5%)	4 (10.8%)	9 (21.4%)	2 (6.1%)	*
	だいたい屋内が多い	24 (77.4%)	27 (84.4%)	35 (79.5%)	33 (89.2%)	33 (78.6%)	31 (93.9%)	
夕食時刻	～19:00	28 (90.3%)	27 (84.4%)	29 (64.5%)	29 (78.4%)	32 (76.2%)	25 (75.8%)	n.s.
	19:00～20:00	3 (9.7%)	5 (15.6%)	15 (33.3%)	7 (18.9%)	10 (23.8%)	8 (24.2%)	
	20:00～21:00	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (2.2%)	1 (2.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	
食 欲	ある	30 (96.8%)	30 (93.8%)	42 (95.5%)	32 (86.5%)	39 (92.9%)	31 (93.9%)	n.s.
	ない	1 (3.2%)	2 (6.2%)	2 (4.5%)	5 (13.5%)	3 (7.1%)	2 (6.1%)	
就寝時刻	～20:00	7 (22.6%)	4 (12.5%)	5 (11.4%)	2 (5.4%)	5 (11.9%)	3 (9.1%)	n.s.
	20:00～21:00	11 (35.5%)	18 (56.3%)	15 (34.1%)	16 (43.2%)	19 (45.2%)	11 (33.3%)	
	21:00～22:00	13 (41.9%)	10 (31.2%)	24 (54.5%)	15 (40.5%)	17 (40.5%)	18 (54.5%)	
	22:00～	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (8.1%)	1 (2.4%)	1 (3.0%)	
寝つき	寝つきがよい	29 (93.5%)	32 (100.0%)	41 (93.2%)	31 (83.8%)	39 (92.9%)	31 (93.9%)	n.s.
	寝つきが悪い	2 (6.5%)	0 (0.0%)	3 (6.8%)	6 (16.2%)	3 (7.1%)	2 (6.1%)	

\* p < .05

性が認められていた。なお「起床状況」でも、昨年との比較の結果、新型コロナの影響による目立った変化は認められなかった。

「朝食摂取状況 (breakfast intake status)」では、「毎日食べる」が、3歳児で83.8%、4歳児で90.5%、5歳児94.0%であり、「だいたい食べる」を加えると、幼児全体の98.2%がきちんと朝食を摂取しているという結果であった。また「朝食摂取状況」でも、新型コロナの影響による変化は認められなかった。

また、朝起きてからの「登園までの様子 (how to spend time before going to pre-school)」を見てみると、全体の幼児の86%以上が「活発である」と回答していたが、「ボーっとしている」が8.9%おり、そのなかでも3歳児は比較的活発であり、その一方で機嫌が悪い幼児が10.8%にみられた。昨年との比較の結果、特に有意差は認められなかった。

### (3) 降園後の遊びと場所について

「降園後の遊び場所 (play ground after school drop-off)」をみると、3歳児は10.8%、4歳児は21.4%、5歳児で6.1%において「どちらかというと屋外が多い」と答えており、多くの幼児は屋内で過ごしていた。昨年と比較したところ、5歳児において5%水準の有意差が認められ、屋外から屋内へと遊びの場が変化していた。新型コロナの影響が認められる結果となった。

### (4) 夕方からの状況

「夕食時刻 (dinner time)」においては、夜7時までに食べる幼児が多く、3歳児で78.4%、4歳児で76.2%、5歳児で75.8%であった。なお、8時から9時までの夕食は3歳児のみで1名(2.7%)でみられた。昨年の調査と比較すると、7時までの夕食摂取の割合が全体に約10%ほど低下していたものの、有意差は認められなかった。

「夕食時の食欲 (appetite for dinner)」では、すべての年齢において、86~93%以上が「食欲がある」と回答をしていた。昨年との比較では、やや食欲のない幼児が増加していたものの、有意差は認められなかった。

「就寝時刻 (bedtime)」は、夜8時までに寝る幼児が、3歳児で5.4%、4歳児で11.9%、5歳児で9.1%であった。8時から9時の就寝は、3歳児が43.2%、4歳児で45.2%、5歳児で33.3%であった。9時から10時の間に寝る幼児は年齢が上がるにつれて割合は増加し、3歳児

で40.5%、4歳児で40.5%、5歳児では54.5%と半数を超えていた。なお、10時以降に就寝している幼児も、3歳児で3人(8.1%)、4歳児で1人(2.4%)、5歳児でも1人(3.0%)に認められた。新型コロナの影響をみると、有意差は認められなかった。

「寝つき(quality of sleep)」は、全体の83~94%の幼児が良好との回答であった。しかし昨年との比較をしたところ、就寝状態の悪化は有意には認められなかった。

## 5. 考 察

本研究の結果、「朝食摂取状況」において先行研究と本研究との大きな差異は認められなかった。また、「登園までの様子」では、4・5歳児はボーっとしている幼児がやや多くなっていった。昨年との比較の結果、大きな行動変容は認められなかったものの、「朝の状況」では、外出自粛の生活が強られる中で、幼児の起床時刻の後ろへのずれが示唆された。これらからは、起床時刻がその後の起床状況に影響を及ぼしている可能性がある。小学校就学までにはアプローチカリキュラムに則った、規則正しい生活スタイルへの維持と向上が、何より必要であろうと考えられる。

降園後の遊びと場所については、昨年と比較したところ、外遊び群が有意に減少していることが明らかとなった。こども環境学会の調査(2020)では、外遊びは減少していないと約8割が回答していたが、コロナ禍において外出の自粛が叫ばれ、家の中にいることが推奨される中、当然かもしれないが、子どもの遊びが屋内に移行していることが明らかとなった。ここからは、子どもたちの午後の身体活動量の減少が危惧される。降園後も運動を外で元気にのびのびと活動をすることが叶わなくなった with コロナや after コロナ時代の生活環境である「新しい生活様式」では、子どもの遊び環境も大きく様変わりしてしまう可能性があり、要注意の調査項目であるといえる。

「夕食時刻」では、小石ら(2017)の研究では、夕食開始時刻の早い子どもほど就寝時刻が早くなり、規則正しい生活リズムのために効果的であることが指摘されている。昨年の調査と比較すると、有意差とまでは言えないものの夜7時までの夕食摂取の割合が全体に約10%も低下しており、新型コロナの影響が大きいことが示唆される。特に、3歳児の夕食摂取の時刻が遅くなっていることが窺われた。したがって、平時と比べて夕食時刻が遅くならないような家庭での工夫や対策が、早急に必要であるものと考えられる。「夕食時の食欲」は、昨年との比較では、統計的に有意な差とまでは言えないものの、やや食欲のない幼児が増加していることも



明らかとなった。日中の活動量が減少し、食欲がない幼児が増加するという、これも新型コロナウイルスの影響が憂慮される結果であった。

「就寝時刻」では、夜10時以降の幼児が、石井ら(2018)の研究では31.8%、渋谷ら(2002)の研究でも50%以上にのぼったという報告があったが、本研究においてはそこまでは至らなかったものの、今後もできるだけ早い時刻に就寝し、十分な睡眠時間の確保を図る必要があるものと考えられる。本研究からは、新型コロナウイルスの影響下では、年齢の低い子どもほど就寝時刻が遅くなっている可能性が考えられる。十分な休養と睡眠は、次の日の活動意欲につながることから、少なくとも夜9時までに就寝できるような生活リズムを、幼児期から身に付けていきたいものである。「寝つき」は、昨年との比較をしたところ、それほど悪化はしていないものの、今後新型コロナウイルスの影響がはじめていくものと推察される。

以上の通り、新型コロナウイルスの影響により、屋内遊びに移行しているといった幼児の生活リズムや健康な生活への影響が明らかとなった。森田(2021)も、幼稚園の休園や外出自粛の影響で、室内遊びが増加し、「太った」「就寝時間が遅くなった」「ゴロゴロする」という回答がみられたことを報告している。本研究では特に、新型コロナウイルスの影響下では、まず子どもの行動変容への影響として、屋外遊びや外遊びが減少し、屋内遊びが増加する傾向が認められたといえよう。

## 6. 結論

これまで多くの研究者や先行研究によって警鐘が鳴らされてきているように、幼児の生活リズムの乱れがますます危惧されている。特に、新型コロナウイルスの影響が懸念される現状にある。よって本研究では、幼児の健康な生活への方策を検討する資料を得ることを目的とし、本邦初の緊急事態宣言下に、関西圏にあるA市の新興住宅地のB幼稚園児の生活実態を把握すべく、その保護者を対象に幼児の生活実態に関するアンケート調査を実施した。

まず本研究においては、起床時間がやや遅くなっている現状が浮き彫りとなった。しかしながら、全体の98.2%の子どもは朝食を摂取できており、多くの幼児が毎日元気に登園していることも明らかとなった。また、登園までの様子にも影響が認められ、降園後の遊び場所でも、外出自粛も相まって、子どもの外遊びが減少し屋内遊びに移行していることが明らかとなった。夕食についても、その摂取時間がやや後ろ倒しになっており、夕食時の食欲でも特に低年齢の3歳児において、減退や悪化が認められていた。さらに、就寝時刻も後ろにずれつつあり、特に3歳児が遅くなっていることが窺われ、寝つきも良好ではない子どもの割合が若干増加し



ていた。この結果からは、子どもの保護育成や養護する大人の行動変容の影響を受ける、低年齢児ほど新型コロナの影響による生活リズムの変化があるのではないかと推測される。

これらの結果を総合的にまとめると、概ね以下のとおりである。

- 1) 新型コロナの影響から、幼児の起床時刻がやや遅くなっており、登園までの様子や態度についても、それまでと違った行動変容が認められた。
- 2) 降園後の遊び場所は、子どもの外遊びが減少しており、屋内で過ごす園児の割合が多くなっていった。
- 3) 朝食の摂取率は良好な一方で、夕食時刻が全体的にやや遅くなっており、食欲の減退にもつながっている可能性がある。
- 4) 夜10時以降に就寝している幼児が認められる等、子どもの就寝時刻が後ろ倒しになっており、寝つきもやや悪くなっていた。

以上のことから、新型コロナに伴う「新しい生活様式」への対応によって、幼児の生活リズムの乱れが容易に危惧される。したがって、今回のコロナ禍においても、起床時刻や夕食時刻、就寝時刻といった規則正しい生活習慣が、子どもの生活や健康を整えるうえで、極めて重要であることが再確認できたと考える。

さらに子どもの朝の状況は、夕食時刻や就寝時刻といった前日の行動に影響を受けていることが推察される。つまり、望ましいとされる夕方以降の行動が、翌朝の子どもの心身の状態に影響を及ぼしていることが示唆される。朝の状況が良いと、日中の活動も活発になり、夕方からの行動にもつながっていく。一旦、その生活習慣が乱れると精神（自律神経）も不安定になり、良好な対人関係づくりもしくくなる。幼児の健やかな成長には、質の高い・良い生活リズムの循環作用が、極めて重要である。特に今回のような「緊急事態宣言」下においては、コロナ禍による自粛生活は子どもの生活や健康面に悪影響を及ぼす可能性のあることが示唆された。

## 7. おわりに

本研究は、世界的に未曾有の影響を受けた新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の「緊急事態宣言」下における幼児の生活実態や現状を緊急に調査することで、子どもの健康・安

全な生活を守る方策および幼児の健全な食事をはじめとする生活の在り方、学校園や家庭での健康に役立つ資料を得て、after コロナや今後の子どもの健康の指導法や方略を明らかにすることを主な目的として実施した。本邦での感染者の報告がなされて3年が経過する2022年現在も、新型コロナの影響が多方面から大きく懸念されるたいへん深刻な状況にある。

結果として、まず起床時間がやや遅くなっている現状が浮き彫りとなった。また、登園までの様子にも影響が認められ、降園後の遊び場所でも、外出自粛も相まって、子どもの外遊びが減少し、屋内遊びに移行していることが明らかとなった。夕食についても、その摂取時間がやや後ろ倒しになっており、夕食時の食欲でも特に低年齢の3歳児において、減退や悪化が認められた。さらに、就寝時刻も後ろにずれつつあり、特に3歳児が遅くなっていることが窺われ、寝つきも良好でない子どもの割合が若干増加していた。この結果からは、大人の行動変容の影響を受ける幼児期には、低年齢児ほど新型コロナの影響による生活リズムの変化がみられるのではないかと推測された。

以上のことから、新型コロナに伴う「新しい生活様式」への対応によって、幼児の生活リズムの乱れや変容が容易に危惧される。したがって、コロナ禍においても、起床時刻や夕食時刻、就寝時刻といった規則正しい生活習慣が、子どもの生活や健康を整えるうえで、極めて重要であることが再確認された。

さて本研究に残された課題については、新型コロナの影響を緊急に調査したが、そもそも幼稚園や低年齢児の生活実態に関する全国的なデータが少なく、比較研究がたいへん難しいといった問題がある。小山(2021)は、コロナ禍においては園児の言動の変化が顕著かつ多岐に渡っていたことから、毎日通園することによる生活リズムや友だちと過ごす園生活が安定した成長に大切であることが示唆されたと報告している。

また、緊急調査であったことから研究の対象者数自体が少ないことも課題であり、他都市等広範囲にデータを収集していくことも、今後の課題である。さらに、本調査では触れられなかったが、屋内遊びが増加しており、幼児が何をして遊んでいるのかといった、その内容や質の変化に着目することも重要であろうと考える。今回、夕食の摂取時刻も遅くなっていたが、おやつとの関係性や、起床時刻が遅くなっていたことから、排便等についても総合的に考察し、健康教育の観点から再検討する必要もあろう。長期化するマスク生活の影響も深刻であろう。今後も時代の先端を行く、より独自性のある研究が望まれる。

最後に、泉(2019)も改めて指摘しているように、子どもの健康な生活づくりを考えると、

幼児の休養（睡眠）・栄養（食）・運動（あそび）の3点について、今後もしっかりと注目していかなければならない。化学メーカーの株式会社クラレ（kuraray）は2020年7月から2021年1月に、この春に小学校に入学する子ども4000人を対象に実施した「将来就きたい職業ランキング」の調査結果を、2021年4月に公表した。男の子の1位「スポーツ選手」がここ数年ずっとトップだったが、初めて2位に陥落している。新型コロナウイルス感染症対策で、スポーツ観戦や旅行もままならない状況が、子どもの夢にまで影響を及ぼしている可能性があると分析されている。奇しくも東京オリンピック・パラリンピック2020は、2021年に延期となり、そのまま北京オリンピック・パラリンピック2022が開催されたが、新型コロナの危機を全世界が脱して、未来を担う子どもたちの健康な生活を願ってやまない。次々と変異株が出てきて、感染の波が続くwithコロナの中で、先の見えない感染症との闘いをしながら、これからも子どもの健全な育成について考えていく必要があるものとする。

## 謝 辞

本調査及び研究を実施するにあたり、ご協力をいただいたB幼稚園の園長ならびに主任の先生をはじめ、担任の諸先生方、また保護者の皆様に、深く謝意を表します。

## 引用文献

- 1) 前橋明, 2001, 子どもの心とからだの異変とその対策について, 幼少児健康教育研究 10 (1), pp.3-18.
- 2) 前橋明・泉秀生, 2008, 大阪市における幼児の生活実態と課題, 幼少児健康教育研究 14 (1), pp.35-54.
- 3) 前橋明・泉秀生, 2009, 保育園幼児の生活実態2007の考察, 幼少児健康教育研究 15(1), pp.21-31.
- 4) 大曾基宣, 2018, 幼児期における健康づくりの重要性と指導方法 — 運動あそび、睡眠習慣、食生活の観点から —, 生涯発達研究 10, pp.79-83.
- 5) 中下富子・佐藤大子・小澤真紀・藤田徹子・石山結加里・長濱美智子・大山洋子, 2019, 幼児児童生徒における生活習慣の現状 — 附属学校園からみた検討 —, 埼玉大学紀要 [教育学部] 68(2), pp.389-408.
- 6) 会退友美・市川三紗・赤松利恵, 2011, 幼児の朝食共食頻度と生活習慣および家族の育児

- 参加との関連, 栄養学雑誌 69(6), pp.304-311.
- 7) 中野貴博・春日晃章・村瀬智彦, 2010, 生活習慣および体力との関係を考慮した幼児における適切な身体活動量の検討, 発育発達研究 46, pp.49-58.
- 8) 平山素子・鈴木和弘, 2018, 生活習慣から見た「幼児の健康」について, 秋草学園短期大学紀要 34, pp.269-278.
- 9) 松坂仁美・前橋明, 2018, 保育園幼児の生活習慣と体格、体力・運動能力の実態と課題 — 就寝時刻からの分析 —, レジャー・レクリエーション研究 85, pp.23-32.
- 10) 渋谷由美子・松永幸子・前橋明, 2002, 幼児期の健康管理に関する研究 — 香川県内の保育園児を対象にして —, 幼少児健康教育研究 11(1), pp.13-22.
- 11) 谷田貝公昭, 2008, 子どもの生活習慣はどう変化したか, 児童心理 62(11), pp.1045-1050.
- 12) 森田陽子, 2021, コロナ禍における幼児の発育発達の変化, 日本幼児体育学会第16回大会講演要旨・研究発表抄録集, pp.42-43.
- 13) こども環境学会, コロナ禍状況の保育所・幼稚園・認定こども園における休園・登園自粛への対応とこどもたちへの影響に関する調査(中間報告) [http://www.children-env.org/?action=common\\_download\\_main&upload\\_id=710](http://www.children-env.org/?action=common_download_main&upload_id=710) (2022年4月1日閲覧)
- 14) 矢野正, 2020, 幼児期の生活実態に関する研究, 発達人間学研究 20(1), pp.1-9.
- 15) 小石浩一・前橋明, 2017, 保育園幼児の生活習慣と体力の課題、および、その対策, 幼児体育学研究 9(1), pp.59-71.
- 16) 石井浩子・前橋明, 2018, 夜型社会の中での幼児の生活リズムと体力、身体活動量との関係, 幼児体育学研究 10(1), pp.45-54.
- 17) 小山祥子, 2021, 新型コロナウイルスによる休園中の園対応と園児の生活, 駒沢女子短期大学研究紀要 54, pp.1-18.
- 18) 泉秀生, 2019, 子どもの生活は変わったか — 幼児の休養(睡眠)・栄養(食)・運動(あそび)に注目して —, 子どもの文化 51(7), pp.92-100.
- 19) 小学1年生が「就きたい職業」ランキング 男の子の定番だった「スポーツ選手」が2位に陥落、1位は? [https://news.goo.ne.jp/article/itmedia\\_business/trend/itmedia\\_business-20210402\\_094.html](https://news.goo.ne.jp/article/itmedia_business/trend/itmedia_business-20210402_094.html) (2021年4月7日閲覧)